日本民家園だより

vol.80

特集 旧江向家住宅・棟持柱の木小屋

企画展示「五箇山」　－重要文化財・旧江向家住宅－
2014年1月4日（土）～5月25日（日）
『日本民家園収蔵品目録19　旧江向家住宅』刊行

写真：雪の江向家（撮影：2006年1月22日）

五箇山　— 重要文化財・旧江向家住宅 —

はじめに

五箇山とは、富山県南西端にある南砺市のうち、旧平村・上平村・利賀村を合わせた地域を指します。国の重要文化財に指定された合掌造り・旧江向家住宅は、このうち上平村の細島地区にありました。庄川に沿った21軒の小さな集落です（現在は変動あり）。

この稿では江向家の現当主・耕一郎さんからの聞き取りを元に、江向家、そして五箇山の暮らしについてご紹介します。耕一郎さんは昭和22（1947）年に生まれ、高校進学で村を離れるまで合掌造りで暮らしてこられました。したがって時代的には、昭和20年代から30年代のことがらが中心です。なお、土地の言葉では集落のことを「ムラ」といいますので、ここでは以下、細島地区のことを「ムラ」と記すことにします。

雪

五箇山は豪雪地帯です。一晩で1ｍも積もるときは雪は音を立てて降るといいます。吹雪のときは部屋の角から雪が舞い込み、ひどく寒かったそうです。

合掌造りの屋根は傾斜が急ですが、そのまま雪が落ちるわけではなく、2週間に一度は雪下ろしが必要でした。カンジキで道を付けながらあの大きな屋根を斜めに上り、てっぺんから雪を切り落としていくのです。しかし、下ろしただけでは家は埋まったままです。そのため今度は、軒周りの雪を掘り下げ、外側に放り投げていきます。冬になると雪を融かすための池を家のそばに作りましたが、それだけではとても始末しきれませんでした。なお、雪は2階の窓近くまで積もりましたが、窓から出入りすることはありませんでした。雪が降るたび入口の前に道を付けていきますので、雪が深くなっても通路は確保されていたからです。

ソラアマ（昭和42年）

移築前の江向家（昭和40年）

ムラの外へ続く道は、毎晩のように雪崩で塞がれました。そのままでは陸の孤島になってしまうため、朝になると交代で道を切りに行きます。子どもたちはこうした道を40分くらいかけて学校に通いました。しかしときに再び雪崩が起こり、子どもたちが巻き込まれることもありました。耕一郎さんの妹は押し流されてダムに落ち、雪につかまって浮いていたところ、釣人にようやく助けられたそうです。

屋根

合掌造りの屋根は扠首と呼ばれる「人」の字型の部材で支えられています。この構造の利点は屋根裏が広く取れることで、「アマ（2階）」「ソラアマ（3階）」と呼ばれるこの空間を活かし、五箇山では養蚕を行っていました。なお、家族が多くてもアマやソラアマで寝起きすることはありません。

屋根の材料は地元で「オオカヤ」と呼ぶススキです。刈り取ったものを蓄えていきますが、それでも一度に葺くのは難しく、数回に分けて葺き替えていきました。しかしこのように葺き替えると、新たに葺いたところと以前葺いたところのあいだにどうしても隙間ができてしまいます。こうした隙間は放っておくと、雨が染み込んで傷んでしまいますので、四角い板を瓦のように差し込んでいきました。

茅葺き屋根の家で何よりも恐ろしいのは火事です。消防団はあっても、駆けつけるころには手が付けられないことが多かったといいます。そのため、とにかく火を出さないのが一番大切なことでした。

ムラでは夜中の11時過ぎに夜警が回りました。回るのは同じ組の7軒、当番になると1人で夜道を歩いて回り、一軒一軒家に入りました。今では考えられませんが、カギなどかかっていませんので夜中によその家の中まで入っていくのです。そして土間の奥まで行き、もう1枚部屋の戸を開けて「ヒノバ

ンサッサリー」と声をかけました。これは「火の番をなさってください」というほどの意味で、このようにして囲炉裏に火が残っていないか確認していきます。この時間になるとどの家も皆寝ていますが、声が聞こえると寝床から「アイアイ」と返事をしました。回るのは365日毎晩です。真冬は雪がありましたので、大変な仕事でした。

暮らし

江向家住宅を真上から見ると、役割の異なる部屋が漢字の「田」の字の形に並んでいます。床は板敷きで、畳は当主の寝間に2畳敷いてあるだけでした。子どもやお年寄りの寝間はムシロ敷き、座敷もござ敷きで、それだけでは冷えるので下にコモを敷きます。「コモ」とは簡単に織ったムシロのことで、材料はムシロと同じく稲わらでした。

長男は「ボン」と呼ばれ、当主とともに特別扱いでした。家族がカボチャのご飯のときも、2人だけは米のご飯でした。カボチャのご飯とは、煮たカボチャをつぶして団子にしたものです。

食事は野菜や山菜が中心でした。魚は行商から買いましたが、生魚は少なく、塩辛い干物が中心でした。

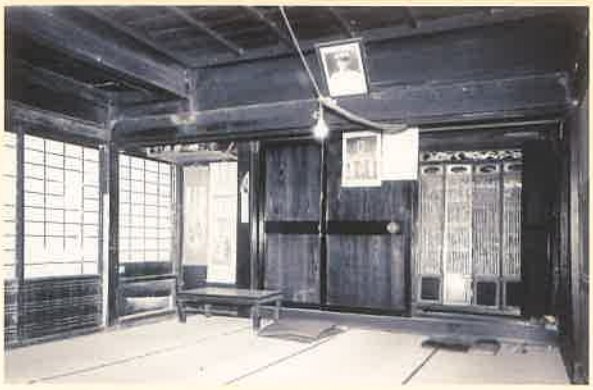
冬場は雪に閉ざされますので、保存食も大切です。ダイコンは収穫するとさおに掛け、干し上げてタクアンにしました。漬物にしないものは、畑などに敷いたムシロの上に置き、さらにムシロをかぶせておきました。こうすると雪の下で保存されることになり、掘り出す手間はありましたが春まで食べることができたのです。この他、ジャガイモやサツマイモは温めておいた方が良いため、床下の室で保存しました。これは幅が1間、深さは子どもが入ったら上がれないほどの大きなもので、中にはもみがらが敷き詰めてありました。

生業

江向家では稲作と畑作を行っていましたが、基本的に自家用です。耕作には馬を使いました。しかし、昭和20年代には常時飼うことはせず、春先の忙しいときだけ借りて家の中のウマヤに入れました。このウマヤに面した通路は狭かったので、馬が顔を出すと子どもたちは通り抜けるのが怖かったそうです。

昭和20年代後半までは養蚕も行っていました。飼育は年1回、アマ(2階)に棚を組んで行います。採れたマユは糸に紡いでから出荷しましたが、糸取りは冬場の仕事でした。

江向家では紙すきも行っていました。これも冬の仕事です。原料にはコウゾを使い、土間に漉き舟を置いて作業を行いました。



オマエ（昭和40年） 右端が仏壇

毎年雪囲いを終えると男たちは出稼ぎに行きました。ムラの大半は農家でしたが、農業だけでは食べていけなかったのです。冬場はほとんど女性と子どもだけでしたので、糸取りや紙すき、わら仕事、そして雪下ろしまで留守を預かる女性たちの仕事でした。娯楽のようなものは何もありませんでしたが、雪が降って時間ができると、子どももつれて親しい家におしゃべりに行ったりしたそうです。そうしたときはお茶うけに、きなこ餅や砂糖を付けた漬物などを食べました。

信仰

五箇山は浄土真宗の盛んな地域です。ムラには寺の代わりに念仏道場があり、お年寄りたちは毎朝お勤めの時間に集まって念仏をあげました。この道場には「ボンサマ」と呼ばれるお坊さんがいました。世襲ですが専業ではなく、普段は他の仕事をしています。ムラでは葬式や法事だけでなく、結婚式などにもボンサマを招きました。

埋葬方法は土葬ではなく、古くから火葬でした。年中行事は少なく、節分や七夕、三月五月の節句などもありません。お彼岸に墓参りすることもなく、お盆にも盆棚を作ったり迎え火を焚いたりすることはありませんでした。

こうした中、一年で最も大きな行事が「ホンコサマ」と呼ばれる秋の報恩講でした。浄土真宗の宗祖、親鸞の命日に行う法要です。この日は親戚が皆集まり、春から採り貯めたゼンマイなどでごちそうを作ります。料理の献立や器の並べ方、出す順番など一つ一つ決まりがありました。器は、普段倉にしまってある朱塗りのお椀を使います。席は「オマエ」と呼ばれる座敷に設けました。この部屋は背丈ほどの大きな仏壇のある、いわば仏間兼客間です。南側の一番良い部屋ですが、普段使うことはありません。行事の際は仏壇の前を上座とし、ここにボンサマや長老格の親戚を座らせました。報恩講では子どもたちにも一人一人お膳が付き、大人と同じように料理が出たので、どの子も楽しみにしていたそうです。

（渋谷卓男）

棟持柱（むなもちばしら）の木小屋 ―多摩丘陵の暮らしが見える小屋―

今回ご紹介する木小屋は、川崎市多摩区で農家を営む松澤家の敷地内にありました。簡素ながらも多摩丘陵の農家における付属屋の貴重な参考例として、平成6（1994）年に民家園へ移築されています。ここでは移築時のご当主の妻である節子さんからの聞き取りを元に、昭和35（1960）年から移築直前までの木小屋の使い方をご紹介します。

松澤家ではこの小屋を「キゴヤ」と呼んでいました。建っていたのは主屋の裏手で、炊事場から外へ出る裏口の正面です。小屋は家事で使用する燃料の保管場所です。自分の畑と山から枝や落ち葉を運び、小屋の中で乾燥させてから風呂やカマド、いろりの火に使いました。クヌギなどの木をマキとしたほか、秋には麦わらや稲わらも運びこみました。わらはご飯を炊くときに使うとふっくらおいしくできあがるそうです。

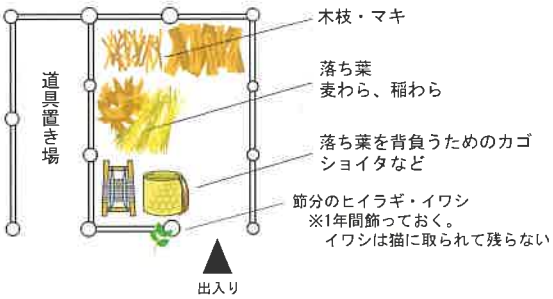
中は二つの部屋に分かれています。広いほうにはマキや落ち葉、そしてカゴやショイタといった燃料の運搬道具など、狭いほうには農家が使うさまざまな道具を置いていました。よく使うものは入口の近くに置いたそうです。なお、マキなどを運ぶのは男性が担当し、女性は小屋の清掃を行いました。

小屋には電気がついていなかったため中はとても暗く、ネコやタヌキが出てくるとびっくりしたといいます。主屋から近いといっても夜はさらに不気味で、予備のマキをカマドの近くに用意し、出来るだけ行かないようにしていました。

屋根はトタン板で出来ていました。燃料のマキなどは水にぬれてしまうと使いものになりません。そのため雨漏り対策が一番大変だったといいます。雨漏りしてしまった場合は漏れた箇所に新しいトタン板をかぶせるだけでした。また、柱の根本が腐って傾いたときはつっかえ棒で支えました。修理では大工を呼ばず、基本的に自分たちで行っていたといいます。

昭和58（1983）年ごろ、主屋の改築時にガス風呂にしたことをきっかけとして木小屋は使われなくなっていきました。こうした民家に付属する建物が保存されるのは珍しく、取り壊されていくことが大半です。しかし、暮らしに密接した付属屋は昔のことを知るための貴重な手がかりとなります。多摩丘陵の農家がどのように暮らしていたのか、木小屋の前で想像してみてはいかがでしょうか。　（畑山拓登）

移築前の木小屋



木小屋の使い方（真上から見た図）

日本民家園だより　vol.80　発行：平成26年1月4日

川崎市立日本民家園　URL　http://www.nihonminkaen.jp/
〒214-0032　川崎市多摩区枡形7-1-1　TEL　044（922）2181　FAX　044（934）8652
交　通　小田急線「向ヶ丘遊園」駅下車南口より徒歩13分
開園時間　［3～10月］9時30分～17時　［11～2月］9時30分～16時30分　（入園は閉園30分前まで）
休園日　毎週月曜（祝日の場合は開園）、祝日の翌日（土・日曜の場合は開園）、12月29日～1月3日
入園料　一般500円、高校・大学生300円、65歳以上300円（川崎市在住の方無料）、中学生以下無料